

## 箴言16-19章「主が立てる計画」

### 1A 主の計画 16

1B 心と思いに働かれる主 1-9

2B 王の宣告 10-19

3B 良い言葉、ねじれた言葉 20-33

### 2A 平和と争い 17

1B 貧しさにある知恵 1-7

2B 背きの罪を覆う者 8-15

3B 愚か者の悲しみ 16-28

### 3A 良い人間関係 18

1B 愚か者の口 1-13

2B 争いの調停 14-24

### 4A 良い社会関係 19

1B 貧しさの中での生き方 1-7

2B 家族と社会 8-18

3B 訓戒の受け入れ 19-29

## 本文

### 1A 主の計画 16

箴言 16 章から読んでいきます。16 章 1 節から 9 節は、計画を立てておられるのは主ご自身であるという内容です。

#### 1B 心と思いに働かれる主 1-9

16:1 人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる。16:2 人は自分の行ないがことごとく純粹だと思ふ。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。16:3 あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。

私たち人間は、計画を立てるようになっています。私たちは、こうやって、ああやって、このようになっていくのだから、それではこのような対策を立てて、それで物事を進めていこうと考えます。特に私たち日本人は、その傾向が強いです。計画を立てて、その通りに進めて、そしてその計画を維持していくのに心血を注ぎます。

しかし、そこで私たちが直面するのは、自分の計画通りに進まないということです。自分が考えている通りではなかった、想定外のことが起こった、そんな時に私たちはとかく頑固に、「私の考えていた所のどこが間違っていたのかしら。」と過剰に反省をし、あるいは、「なぜ、神はこんなことをす

るのだろうか。」と神に対して不満を述べるのです。しかし、それは前提が元々間違っています。計画というのは、誰のものなのでしょう？神のものです。私たちの計画ではなく、神の計画です。

1 節に、心では計画を持っていても、舌に答えをくださるのは主であると言っています。人が上手に、こう言えばよいああいえばよい、と持っていても、結局、自分の思っていることが口から出てきます。自分は自分をだますものです。2 節には、自分では行いが純粹だと思っているときこそ、それ自体が危うく、主はその魂の値打ちを試されます。ですから、3 節があります。自分のしようとしていることを、主にゆだねるのです。自分ではこうすべきだ、ああすべきだという強い思い、衝動に駆られるほどの強い思いがあります。しかし、主にゆだねるのです。そうすれば、主が自分の立てた計画を、ご自分の御心に沿って清めてくださいます。

16:4 主はすべてのものを、ご自分の目的のために造り、悪者さえもわざわいの日のために造られた。16:5 主はすべて心おごる者を忌みきらわれる。確かに、この者は罰を免れない。

神のご計画の中で不思議なのは、悪者さえもご自分の目的のために用いられるということです。私たちは、悪者がいるということは神の支配がそこには届いていない、と思ってしまうのです。神は必ず悪者を裁かれます。5 節に、心おごる者を忌み嫌われるとあるとおりです。けれども、その悪者の存在を通してさえも、ご自分の目的を達成されるのです。そしは逆に言うと、神に用いられているからといって、その器が義と認められているとは必ずしも言えない、ということもあります。ですから、神は悪を悪として罰しますが、その悪さえもご自分の目的のために積極的に用いておられることを知れば、私たちは不完全な状態であっても、それでも神は私たちを導いて、支えていておられることを知って、安心なのです。

16:6 恵みとまことによって、咎は贖われる。主を恐れることによって、人は悪を離れる。16:7 主は、人の行ないを喜ぶとき、その人の敵をも、その人と和らがせる。16:8 正義によって得たわずかなものは、不正によって得た多くの収穫にまさる。16:9 人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。

主の御霊が働かれるところには、恵みとまことがあります。そして魂の救いがあります。咎は贖われる、とありますね。そして、人々が悪を避けている、その主の恐れがあります。恵みとまことがあります、かつ主への恐れを持っているという二つが存在しているとき、主のご計画がそこで進んでいるということができます。さらに興味深いのは、主が良しとされているものは、敵さえも和らがせるということです。主が願われているのは、平和の実です。正義そして平和です。それから 8 節、たとえそれが量的に少なくとも、そこから出てくる御霊の実を主は尊ばれます。それから 9 節はまとめです。いろいろなことを私たちは心に思い巡らし、こうすべきだ、ああすべきだと考えますが、それを確かにするのは主ご自身です。

## 2B 王の宣告 10-19

10 節から王についての教えです。

16:10 王のくちびるには神の宣告がある。さばくときに、その口に誤りがない。16:11 正しいてんびんとはかりとは、主のもの。袋の中の重り石もみな、主が造られたもの。16:12 悪を行なうことは王たちの忌みきらいこと。王座は義によって堅く立つからだ。16:13 正しいことばは王たちの喜び。まっすぐに語る者は愛される。16:14 王の憤りは死の使者である。しかし知恵のある人はそれをなだめる。16:15 王の顔の光にはいのちがある。彼のいつくしみは後の雨をもたらず雲のようだ。

神の計画についてソロモンが教えたその直後に、王についての格言を語っているのは意味があります。しばしば、王によって神の計画が表れるからです。「ローマ 13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。」ですから、王が裁きを行なう時に、それは神の正義を体現していることが多いのです。そして王が下す判断は、11 節にあるように、公正に基づくものです。ソロモンが、二人の遊女の間を裁いたことを思い出してください。赤ん坊が死んでしまったのですが、どちらの赤ん坊かということと言い争いましたが、ソロモンはその子を二つに切って、それぞれに分け与えるがよいと判決を下しました、すると一人は、「そのようにしてください」と言いましたが、もう一人は、「相手にお渡しください。」と言ったのです、ソロモンは後者、相手にお渡しくださいと言ったほうが本物の母親だと判断しました。公正な物差しです。

そして権威が立てられているその理由は、悪を罰することです。ローマ 13 章にも、支配者が剣を持っているのは、悪を行なっている者に制裁を加えるためであることが書いてあります。私たちが、車のスピード違反や、脱税などで仮に捕まった時は、「神のしもべなのだ。」と思って、その人たちを敬ってください。けれども、時にその裁きが行き過ぎる時があります。その時に知恵ある者は宥めることができます。ダニエルのことを思い出します、ネブカデネザルは自分の周りにいる知者と呼ばれている者たちはみんな、まやかしを言っていることに気づき始めました。それで全ての知者を殺せという命令を出しました。けれどもダニエルが知恵をもって、その実行者に対処したので、猶予期間が与えられたのです。そして 15 節、王の顔が輝き、慈しみを施す時は、その国全体に潤いをもたらします。したがって、私たちは自国の支配者のために祈るべきです。「2テモテ 2:1-2 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。」

16:16 知恵を得ることは、黄金を得るよりはるかにまさる。悟りを得ることは銀を得るよりも望ましい。16:17 直ぐな者の大路は悪から離れている。自分のいのちを守る者は自分の道を監視する。16:18 高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。16:19 へりくだって貧しい者とともに

いるのは、高ぶる者とともについて、分捕り物を分けるのにまさる。

王にとって、知恵こそが宝です。これを書いているソロモンは、即位後に、神にこのことを願いました。富ではなく、民を治めることのできる知恵を求めたのです。知恵において大切なのは、悪を離れているということ。私たちは、悪に対抗しているうちに自分もその悪に染まる危険をいつも持っています。したがって、恐れつつ、その悪を避けながらその人を憐れんでいかなければいけません（ユダ 22-23 節）。そしてもう一つは、自分の道を監視することです。自分の道は正しいと思い込んでしまう傾向がありますから、気をつけます。

そして高ぶりは、王という権威を与えられた人には、いや全ての人が気をつけなければいけない大事な素質です。今回は、15 章の最後で「謙遜は榮譽に先立つ」とありました。引き上げてくださるのは主ですから、自分は低いところに留まっていればよいのです。そして 19 節ですが、イエス様が貧しい者たちと共にいて、神の富を分かち合ったように、能力がある人、発言力がある人、そういう人と共にいるのではなく、小さな者と共にいることを喜びとします。

### 3B 良い言葉、ねじれた言葉 20-33

16:20 みことばに心を留める者は幸いを見つける。主に拠り頼む者は幸いである。16:21 心に知恵のある者は悟りのある者となえられ、その快いことばは理解を増し加える。16:22 思慮を持つ者にはいのちが泉となり、愚か者には愚かさが懲らしめとなる。16:23 知恵のある者の心はその口をさとし、そのことばに理解を増し加える。16:24 親切なことばは蜂蜜、たましいに甘く、骨を健やかにする。

私たちが、親切なことばをかけられるその源になっているのが、20 節「みことばに心を留める」というところからでしょう。本当に反芻し、それを自分に適用させ、その時にそれは今までの自分にあり方と異なりますが、そこで自分ではなく神の御心を選び取る。その過程において、いのちの泉が自分から流れ出ます。

16:25 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。16:26 働く者は食欲のために働く。その口が彼を駆り立てるからだ。

これは、「そのようなものだ」という事実を指しています。食べるために働いています。パウロも、「働きたくない者は食べるなど命じました。(2テサロニケ 3:10)」と言っていますから、原則としてはその通りです。

16:27 よこしまな者は悪をたくらむ。その言うことは焼き尽くす火のようだ。16:28 ねじれ者は争いを巻き起こし、陰口をたたく者は親しい友を離れさせる。16:29 暴虐の者は自分の隣人を惑わし、良くない道へ導く。16:30 目くばせする者はねじれごとをたくらみ、くちびるをすぼめている者は悪

を成し遂げた者だ。

言葉による災いです。今回は、怒りを現すことの愚かさが読みましたが(12:16)、それを陰口として話しても同じような効果で、人々を汚します。陰口は、その話題にしている人を敵にすることで互いに一つになるために使われる道具ですが、28 節にあるように実際は、「親しい友を離れさせる」ということを行いません。30 節も、そのような悪いことを隠れて行なっている姿です。目配せ、そして唇をすぼめている姿です。

16:31 しらがは光栄の冠、それは正義の道に見いだされる。

主と共に歩む者が長い年月を経ると、このようになります。しらが頭は、光栄の冠です。日本のカルバリーチャペルでは、秋に教会の指導的立場にいる奉仕者たちを集めてキャンプをしますが、その時に白髪頭になっている牧師や宣教師が招かれます。私はそれが大好きです、神の真理をどのように奉仕の中で生かすのかその知恵に満ちています。

16:32 怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は町を攻め取る者にまさる。

これは大きな挑戦ですね、霊の戦いにおいてこの領域を主にあって制覇したいと思っています。けれども、敵は外にある存在ではなく、自分自身の心にあります。怒りという問題です。これは、後で学びますが、善悪の区別を付けてはいけないということではありません。神は悪を罰する方です。しかし、神に怒りをゆだね、平和に役立つことを求める。こうした心の治め方をすれば、その領域に進出することができます。

16:33 くじは、ひざに投げられるが、そのすべての決定は、主から来る。

これは、この 16 章のまとめのような言葉です。人のする決定というものがあっても、主がそれを定めておられるのだ、ということです。くじは、旧約の時代、神の御心を見定める時に使われていた道具でした。例えば、ヨシュア記において、約束の地の相続の割り当てをくじによって決めました。そして、新約時代においては、使徒行伝1章でペテロが、イスカリオテのユダの代わりに使徒を決める時にくじを引いたのを終わりにして、それ以降は出てきません。それ以降は、聖霊の導き、預言などの賜物が用いられて御心を見定めています。

## **2A 平和と争い 17**

17 章は、何らかの形で平和と争いについて取り扱っています。

### **1B 貧しさにある知恵 1-7**

17:1 一切れのかわいたパンがあって、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。

17:2 思慮のあるしもべは、恥知らずの子を治め、その兄弟たちの間にあつて、資産の分け前を受け継ぐ。17:3 銀にはるつぼ、金には炉、人の心をためすのは主。17:4 悪を行なう者は邪悪なくちびるに聞き入り、偽り者は人を傷つける舌に耳を傾ける。17:5 貧しい者をあざける者は自分の造り主をそしる。人の災害を喜ぶ者は罰を免れない。

貧しい状態について、1 節と 5 節に書いてあります。貧しくあつても、どんな小さなことでもそれに感謝することができれば、そこに平和の実が結ばれます。そして、どんなに富んでいたとしても、その富を求めることを目的としていれば、争いが起こります。それは物質的なこと、経済的なことに限らず、地位であるとか、中心的な働きであるとか、精神的なことにも及びます。2 節にある思慮のあるしもべですが、こうやって小さなことに忠実である人、よく管理できる人が、結局は大きなものを任せられるのです。そして、私たちはこのようなことを悟るために、3 節、神は私たちの心を試されます。本当は何を考えているのか、思っているのか、感じているのか、私たちは試されることによって自分を知り、それで初めて主に拠り頼まなければいけないことを悟るのです。そして 4 節は、先ほどと同じ陰口の内容ですね。陰口を聞いた時に喜んでいたら、自分の心は相当、汚されていると思ってください。

17:6 孫たちは老人の冠、子らの光栄は彼らの父である。17:7 すぐれたことばは、しれ者にふさわしくない。偽りのくちびるは、高貴な人にはなおさらふさわしくない。

どんなにしっかり神の真理を教えても、それを取捨選択したり、投げ捨ててしまう聞き方をする人は、なおのことその聞く機会は少なくなります。そして、聞く耳のある人は、他の偽りの言葉を避けるべきですね。どちらも聞こう、とせず、真理の言葉を聞いていくのです。

## 2B 背きの罪を覆う者 8-15

17:8 わいろは、その贈り主の目には宝石、その向かう所、どこにおいても、うまくいく。17:9 そむきの罪をおおう者は、愛を追い求める者。同じことを繰り返して言う者は、親しい友を離れさせる。

平和や良き関係のために取られる方法として、賄賂があります。誰かを宥めるために、贈り物をするのです。確かに、人間的にはそれはうまく行くことをソロモンは認めています。しかし、真実な平和は背きの罪を覆うこと、つまり赦しと愛です。そして赦しの反対語は、「思い起こす」ことです。過去に犯した背きを何度も語れば、損をするのは自分です。赦しなき心は、人との交わりを切り離します。

17:10 悟りのある者を一度責めることは、愚かな者を百度むち打つよりもききめがある。17:11 ただ逆らうことだけを求める悪人には、残忍な使者が送られる。17:12 愚かさにつけていいる愚かな者に会うよりは、子を奪われた雌熊に会うほうがました。17:13 善に代えて悪を返すなら、その家から悪が離れない。

10 節は興味深いです、悟りというのは量で決まりません。心の態度、叱責を受け入れる、へりくだった態度で決まります。一度言えば、十ぐらいのことを悟ることができる一方で、百言っても、一つも分からないというのが現実なのです。イエス様は、「聞く耳のある者は聞きなさい。」と言われました。そして、逆らうことの愚かさ、また善に対して悪で返す、人の親切や愛を試すような人も、その悪が自分の身近なところから離れることはありません。

17:14 争いの初めは水が吹き出すようなものだ。争いが起こらないうちに争いをやめよ。17:15 悪者を正しいと認め、正しい者を悪いとする、この二つを、主は忌みきらう。

争いというのは、事前に起こらないように用意周到でなければいけないです。しかし興味深いのは、箴言ではそのすぐ後で、その格言を誤解、あるいは悪用するのを防ぐためにすぐにその歪曲を戒める格言が書かれているところがあります。それがこの一つです。とにかく事態を收拾させようとして、善悪の見境なく争いをなくそうとする傾向が私たちにあります。銃をもった銀行強盗と警官隊が銃撃戦になっている時に、その銃撃を見て、「どちらにも非がある。」という喧嘩両成敗にすような見方は、主は忌み嫌われます。正しいものを正しいとし、悪は悪とする識別力です。

### 3B 愚か者の悲しみ 16-28

17:16 愚かな者が思慮もないのに、知恵を買おうとして、手に代金を持っている。これはいったいどうしたことか。

魔術師シモンが、聖霊の賜物を人に与えるために金で買おうとしたことを思い出します。けれども、知恵について知恵もないのにそれを手にしようとはありますね。まずしなければいけないこと、主の命令に聞くことをしないのに、そのことについて知識だけ、またその結果得られる栄誉を求めようとして、先走ることはあります。

17:17 友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。

私の個人的に好きな御言葉です。苦しみの時、試練の時にそれでも互いに練磨する、愛し合う仲だったのかどうかは、言葉にできぬかけがえのない財産です。

17:18 思慮に欠けている者はすぐ誓約をして、隣人の前で保証人となる。

ある人のことを思いやることと、その人に約束事をするとは別です。けれども、私たちはしばしばそれを混同してしまいます。約束事をしなくても、その人に良くしてやることはできるのです。

17:19 そむきの罪を愛する者はけんかを愛する。自分の門を高くする者は破滅を求める。17:20 心の曲がった者は幸いを見つけない。偽りを口にする者はわざわいに陥る。17:21 愚かな者を生

む者には悲しみがあ、しれ者の父には喜びがない。17:22 陽気な心は健康を良くし、陰気な心は骨を枯らす。

前回もありましたが、心の健康を箴言はしばしば取り扱っています。陽気であること、大切です。私も時々、本当に面白い動画、話、そういったものを見て、単純に笑って息抜きをすることもやっています。

17:23 悪者は人のふところからわいろを受け、さばきの道を曲げる。17:24 悟りのある者はその顔を知恵に向け、愚かな者は目を地の果てに注ぐ。17:25 愚かな子はその父の憂い、これを産んだ母の痛みである。17:26 正しい人に罰金を科し、高貴な人をその正しさのゆえにむち打つのは、どちらもよくない。

愚かなことをする者たちがもたらす悲しみです。愚か者は、争いへ発展させることが好きです。そして 24 節は興味深いですが、愚か者は目を地の果てに注ぐ、とあります。目の前にある現実、それに取り組むべき知恵を見ずに、いつも遠く、遠くを見えています。

17:27 自分のことばを控える者は知識に富む者。心の冷静な人は英知のある者。17:28 愚か者でも、黙っていれば、知恵のある者と思われ、そのくちびるを閉じていれば、悟りのある者と思われる。

ここも興味深い格言です。初め、27 節で言っていることはその通りなのです。けれども、自分を知恵ある者にするために、そう見せるために、27 節の格言を自分に当てはめる愚かさがここにあります。内なる人を探るのではなく、表向き、自分が霊的に見せようとする、そうした愚かさをソロモンは取り扱っています。

### **3A 良い人間関係 18**

18 章においては主に、人との関係を悪くさせる愚かさについて書いてあります。

#### **1B 愚か者の口 1-13**

18:1 おのれを閉ざす者は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいます。  
18:2 愚かな者は英知を喜ばない。ただ自分の意見だけを表わす。18:3 悪者が来ると、侮りも来る。恥とともに、そしりも来る。

これの直訳は、「自分を人から分離させる者」であります。先ほどの「友はどんなときにも愛するものだ。」の反対行為です。友であるためには、責任が伴います。後に学びますが、鉄が鉄を研ぐように、友が研ぐのだという格言があります。それを避ける、または自分が正しいとして、他の人が間違っているとしてその関係を避けるのは、自分の欲望のままに求めることなのだということです。



そしてそのような人は自分の意見だけを言い表しています。

18:4 人の口のことばは深い水のような。知恵の泉はわいて流れる川のような。18:5 悪者をえこひいきすることはよくない。正しい者をさばきのときに否むこともよくない。

言葉というのが、単なる技法ではないことが良く分かります。心、いやその人の主の前における姿勢そのものが、その人の霊を定め、その心の奥底から言葉が出てきます。知恵の御霊に満たされる必要があるんですね。そして5節は、何回か繰り返されていますが、治める時にきちんと公正をもって治めなければいけないことを教えています。すべての人が平等ということはありません。御霊に導かれている人はそれだけ、大きなものが任されていかなければいけませんし、肉の行いをしている人は、任されてはいけません。

18:6 愚かな者のくちびるは争いを起こし、その口はむち打つ者を呼び寄せる。18:7 愚かな者の口は自分の滅びとなり、そのくちびるは自分のたましいのわなとなる。18:8 陰口をたたく者のことばは、おいしい食べ物のような。腹の奥に下っていく。

再び、唇による争い、陰口の問題です。

18:9 自分の仕事をなまける者は、滅びをもたらす者の兄弟である。18:10 主の名は堅固なやぐら。正しい者はその中に走って行って安全である。18:11 富む者の財産はその堅固な城。自分ではそそり立つ城壁のように思っている。18:12 人の心の高慢は破滅に先立ち、謙遜は栄誉に先立つ。18:13 よく聞かないうちに返事をする者は、愚かであって、侮辱を受ける。

これは興味深いです。初めに9節、仕事を怠ければ、その刈り取りをします。けれども、富に頼る者は、それがそそり立つ城壁のようになっていると思込みます。けれども、主の名こそが堅固な櫓です。そして、富への依存は高慢にも関わり、高慢は破滅に先立ちます。そして高慢の現われとして、人の訴えや話を聞かないというものがあります。自分で勝手に解釈して、自分の都合の良いようにしてしまうことも、「よく聞かない」ことになります。

## 2B 争いの調停 14-24

18:14 人の心は病苦をも忍ぶ。しかし、ひしがれた心にだれが耐えるだろうか。18:15 悟りのある者の心は知識を得、知恵のある者の耳は知識を求める。

知識を得る心も大事ですが、その心がひしがれては元もこうもありません。落胆は、午前礼拝で学びましたが、敵の攻撃の武器としては最大のものの一つです。

18:16 人の贈り物はその人のために道を開き、高貴な人の前にも彼を導く。18:17 最初に訴える

者は、その相手が来て彼を調べるまでは、正しく見える。

公平な裁判を曇らせるもの、それが賄賂、贈り物がありますが、17 節、最初に訴える者、というものもあります。私たちはとかく、初めに話し出す人の言っていることを聞いて、それに強く反応して怒ったり、憤ったりして、実はそうではない、あるいはまた別の側面があるのに、早合点して判断することがしばしばあります。

18:18 くじは争いをやめさせ、強い者の間を解決する。

先に見ましたが、くじを引くのは人間だが、それを決定するのは主であるとありました。主の御心が示される時に、人々のいさかいが止まります。私たちにとっては、聖霊の導きであり、そして聖霊がお書きになった聖書の言葉です。

18:19 反抗する兄弟は堅固な城よりも近寄りにくい。敵意は宮殿のかんぬきのようだ。

そうですね、一度、反抗の心を持つとこうなってしまいます。どんなに説得しても、かなり堅くなってしまいます。教会の中でこのような人が出てくる時、パウロはテモテに「反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。(1テモテ 3:25)」と言いました。

18:20 人はその口の結ぶ実によって腹を満たし、そのくちびるによる収穫に満たされる。18:21 死と生は舌に支配される。どちらかを愛して、人はその実を食べる。18:22 良い妻を見つける者はしあわせを見つけ、主からの恵みをいただく。

妻、良い伴侶というのは、自分の努力によって得られるのではなく、主からの恵みであります。ですから、良い伴侶を得たいと願う人々はぜひ、祈り始めてください。

18:23 貧しい者は哀願するが、富む者は荒々しく答える。18:24 滅びに至らせる友人たちもあれば、兄弟よりも親密な者もいる。

友の大切さ、が書かれています。果たして、自分が良い友を選んでいるのかどうか？時に、自分たちだけで満足する友になっていないか？それとも、本当に神の御心を求めている関係になっているのかどうか？誰のところに自分が行っているか、自分の都合を聞いてくれる人か、それとも本当に自分の益になることを考えてくれる人か、考える必要があるでしょう。

## 4A 良い社会関係 19

### 1B 貧しさの中での生き方 1-7

19:1 貧しくても、誠実に歩む者は、曲がったことを言う愚かな者にまさる。

そうですね、多くを持っていなくても、その貧しさの中で誠実、これがあたかも自分が多くを持っているように動いてしまって、生活が曲がってくるよりも優っています。

19:2 熱心だけで知識のないのはよくない。急ぎ足の者はずまずく。

2 節は 1 節につながっています。何かの目標に到達したいと思って、急ぎ足になり、誤った熱心になってしまうことがあります。知識は頭では受け入れているのですが、実際が伴っていない、他の原則で動いているのです。主は時間を与えてくださっています。じっくりと、主が自分の内でなされていることを待っていく、そうした主を待ち望む忍耐が必要なのです。

19:3 人は自分の愚かさによってその生活を滅ぼす。しかもその心は主に向かって激しく怒る。

これはよくあることです。何かが起こると、「なぜ主はこんなことをするのか？」と怒るのですが、実は自分の愚かさによって引き起こされたものであったりします。

19:4 財産は多くの友を増し加え、寄るべのない者は、その友からも引き離される。19:5 偽りの証人は罰を免れない。まやかしを吹聴する者も、のがれられない。19:6 高貴な人の好意を求める者は多く、だれでも贈り物をしてくれる人の友となる。19:7 貧しい者は自分の兄弟たちみなから憎まれる。彼の友人が彼から遠ざかるのは、なおさらのこと。彼がことばをもって追い求めても、彼らはいない。

これは、悲しいですが現実のこととして、ソロモンは書いています。富が見かけの友達を多く作り、貧しければそうした友は遠ざかるということです。繰り返しますが、真実の友情を作りましょう。自分がこれだけできる、これだけのものを持っているということを見せることによって友を得るのではありません。真実な友情は、表だった華やかさ、楽しみ、目立つところではなく、静かに、けれどもしっかりと確実に、忠実に神に仕えているところに起こされます。

### 2B 家族と社会 8-18

19:8 思慮を得る者は自分自身を愛する者、英知を保つ者は幸いを見つける。

思慮というものは、他の人々の益を考えてのことなのですが、結局は自分の霊的、精神的な幸いにつながるということです。

19:9 偽りの証人は罰を免れない。まやかしを吹聴する者は滅びる。

自分のしていることが、ある人にやましいと思うようになると、だんだん隠すようになります。けれども、それが偽り、まやかしになっていることに気づきません。その偽りが自分をダメにしてしまうことに気づかないといけません。

19:10 愚かな者にぜいたくな暮らしはふさわしくない。奴隷が主人を支配するのは、なおさらのこと。

多くを神から任された人が治め、指導するべきであり、その反対は大変なことになります。

19:11 人に思慮があれば、怒りをおそくする。その人の光栄は、そむきを赦すことである。19:12 王の激しい怒りは若い獅子がうなるよう。しかし、その恵みは草の上に置く露のよう。

すばらしいですね、人の背きを赦すことはその人の光栄です。赦すことは、自分を貶めてしまう、屈辱的に感じてしまうかもしれません。けれども、そうではないむしろ光栄をもたらします。けれども、それは同時に悪を是認することではありません。王は悪に対しては怒りを示し、そうでないときは恵みによって支配します。

19:13 愚かな息子は父のわざわい。妻のいさかいは、したたり続ける雨漏り。19:14 家と財産とは先祖から受け継ぐもの。思慮深い妻は主からのもの。

家族の中での平和が強調されています。特に妻は、大きな役割を担っています。これは、主からでなければ与えられない賜物です。

19:15 怠惰は人を深い眠りに陥らせ、なまけ者は飢える。19:16 命令を守る者は自分のいのちを保ち、自分の道をさげすむ者は死ぬ。19:17 寄るべのない者に施しをするのは、主に貸すことだ。主がその善行に報いてくださる。19:18 望みのあるうちに、自分の子を懲らしめよ。しかし、殺す気を起こしてはならない。

一つ一つの戒めですが、寄るべのない者、そうですね、見返りを求めないで行っていくというところに、私たちがキリスト者であることの醍醐味があります。この時にこそ、無代価でご自身をお捧げになってくださったキリストの愛に満たされるからです。そして 18 節は、ちょっと過激な表現に聞こえてしまいますが、これは親がしつけるときに必要な指針です。しつけるときに、自分の怒りに任せて行なってしまうのか、それともその子が痛みを受ける以上に自分が痛くて、それでもしつけるのか、この違いです。

### 3B 訓戒の受け入れ 19-29

19:19 激しく憤る者は罰を受ける。たとい彼を救い出しても、ただ、これをくり返さなければならぬ。19:20 忠告を聞き、訓戒を受け入れよ。そうすれば、あなたはあとで知恵を得よう。19:21 人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。

19 節と 20 節がつながっています。忠告に対して激しく反応すると、その部分で訓戒を拒んでいるので、繰り返してしまいます。そして 21 節もつながっています。怒ってしまう自分はいろいろと、考えて計画を立てるでしょう。けれども、計画は誰のものですか？そう、主のものであります。主のはかりごとだけが成ります。20 節に戻りますが、忠告はその時は悟ることができなくても、後で知恵を得ることができるのです。

19:22 人の望むものは、人の変わらぬ愛である。貧しい人は、まやかしを言う者にまさる。19:23 主を恐れるなら、いのちに至る。満ち足りて住み、わざわざに会わない。

ここが、今回の学びで強調されていることですね。私たちには、個人においても、教会においても、社会においても、一種の貧しさがあります。私と妻はしばしば二人で話していますが、「格好のいい教会にならなくてよい」と言っています。多くの欠けや不足がある、それでもそこに主がおられる、祈る人たちがいる、御言葉を聞く人々がいる。そして、それが途中で飽きてやめるのではなく、「変わらぬ愛」いつも安定して、行なっている。その安定した、静かな、けれども喜びのあるところに、聖霊が働いて何かをしてくださいます。人が望んでいるのは、そうした人の変わらぬ愛ですから。そして満ち足りた生活です。

19:24 なまけ者は手を皿に差し入れても、それを口に持っていかうとしない。

怠惰をよく言い表した言葉ですね。これを霊的に当てはめると、主の命令は単純なのに、その単純なその一歩を踏めない、これが霊的怠惰と言えるでしょう。

19:25 あざける者を打て。そうすれば、わきまのない者は利口になる。悟りのある者を責めよ。そうすれば、彼は知識をわきまえる。19:26 父に乱暴し、母を追い出す者は、恥を見、はずかしめを受ける子である。19:27 わが子よ。訓戒を聞くのをやめてみよ。そうすれば、知識のことばから迷い出る。19:28 よこしまな証人は、さばきをあざけり、悪者の口は、わざわざのみこむ。19:29 さばきはあざける者のために準備され、むち打ちは愚かな者の背のために準備されている。

最後は、子に対する躰、それから裁判における懲らしめです。子に対する躰は、処罰ではありません。むしろ、これから処罰に値する愚かなことをしないように、予防のために行なうことです。懲らしめによって、罪に定められることから救い出します。